

のりあき  
杉渕 紀昭 さん (陶号・紀史)

おおだて陶芸工房「鳳凰窯」  
大館市大茂内字諏訪下101-4  
TEL.0186-48-6466  
http://odate-tougei.com  
※工房見学、陶芸体験は要予約



私のギャラリー

M y g a l l e r y

NORIAKI SUGIBUCHI

陶芸

創作の喜びを  
器に込めて



マグカップ

の窯元に21歳で弟子入り。25歳まで青磁作りを学んだ。作業で腰を痛めて帰郷後は会社勤めの傍ら、休日に市内の公共施設の窯を借りて制作を続けた。会社に32年間勤めたが「陶芸に専念して腕を磨きたい」と58歳で早期退職し、2014年に窯を開いた。今は「ものづくりの楽しさ、自分で作った作品を使う喜びを知ってほしい」と体験教室を開くほか、大館の土を使った陶器作りにも挑む。「陶芸は、答えがないし、終わらない。だからいい」。穏やかな表情に充実感が漂っていた。



青磁の「ねこ蚊取り」

透明感のある青緑色を基調とする「青磁」。起源は古代中国で、時代や窯ごとに色合いは異なる。中国・北宋時代の窯元「汝窯」では、雨上がりの空の色を理想として追い求めた。

杉渕紀昭さんは、青磁を中心に作陶している県内では数少ない陶芸家。大館市に構える「鳳凰窯」には青磁をはじめ、土や釉薬、焼き具合で色や質感に違いを出した色とりどりの作品が並ぶ。

桜模様のマグカップは、半乾きの土の表面を彫り、色土を埋める技法「象嵌」を用いた。器の表面に入ったひびのようない文様は「貫入」と呼ばれ、窯の扉を開けた瞬間、焼き物が冷たい空気に触れると生じる。「貫入も釉薬の色の出方も、どんな作品になるか窯出しまで分からない。そこが陶芸の難しさであり、面白さ」。

かつて映画監督を志し、神奈川県映画専門学校で学んだ杉渕さん。卒業後、ものづくりの道を模索する中で陶芸に興味を持った。知人を介し、紀州徳川家の御用窯だった「瑞芝焼」(和歌山県)